TOKYO BAPTIST CHURCH 東京バプテスト教会 Weekend Message
英語のメッセージが聴ける!! http://tokyobaptist.org/worship/sermons/index.htm

神からのラブレター

ヨハネによる福音書３：16

2011年8月6日&7日
渡辺　聡　牧師

ラブレターを書いたことがありますか? ラブレターってどんな気持ちで書くでしょうか?　ラブレターをもらった人はいますか?　もらった時、嬉しかったですか?　今日は、神があなたに宛てて書いてくれたラブレターについてお話します。

神はいろいろな形であなたに語りかけてきます。例えば、自然を見ると神がどんなに野の花や生き物をいつくしんで造られたかということが分かります。イエス様はよく野の花を見よとか空の鳥を見よ、とメッセージされました。神が野の花を美しく装わせ、鳥がその日暮らしの生活をしていても、ちゃんと食べ物を与えられているのを見るならば、神があなたに対してもっと良くしてくださることが分かるでしょうと教えています。

私は、蝶が好きです。作家のジュール・ルナールは、「蝶」という詩で、「二つ折りのラブレターが花の番地を探してる」と詠っています。蝶は神からのラブレターではないでしょうか。子どもの頃、雑木林でオレンジと黒のゼブラ模様の見たこともないシジミチョウを見つけました。こんなきれいな蝶がどうやって生まれたんだろうと感心していると、隣でそれを見ていた父が、「それは神様が聡に見せてあげようと思って造ってくれたんだよ」と言いました。今でも蝶が好きですが、素敵な蝶を見つけると神が「ほら、どうだい?この蝶の翅はこんな模様にしてみたんだけど」と語りかけてくれているように感じます。

神は時に私たちの夢を通じて語りかけてこられることもあります。TBCのメンバーと話していると、面白い夢について聞くことがあります。ある日メンバーのススムさんが不思議な夢を見ました。神を信じるか信じないか迷っていた時のことだったそうです。夢の中で知らない男の人が彼に近寄ってきて「これから君はどこに行くんだい」と聞くのだそうです。「さあ、自分でも分かりません」と答えました。でも、こんな人知らないしと思っていぶかしんでいたら、「突然キスをされた」のだそうです。「うわっ」と思って目が覚めたのですが、直感的にそれがイエス様だったと感じたそうです。夢というのは人間の心の奥深くと結びついています。おそらく彼の中にあった深い宗教体験が夢を通じて表れたのでしょう。彼の人生がそこから変わったというのも興味深いです。

しかし、神は自然や夢だけでなくもっと確実な方法でご自分のことをあなたに知らせてくださいます。それは今あなたが手に持っている聖書です。自然や夢を通しても神を感じることができます。でも、それは感覚的なものなので私たちの感じ方や文化的なバイアスを受けて本当の神とは違うイメージになってしまうこともあります。

しかし私たちは聖書を持っているので、神が私たちに語りかけてくださっているメッセージをぶれることなく受け止めることが出来るのです。もし、正しい読み方で聖書を読むならば、私たちは神がわたし達に何を語りかけ、何をすることを望んでおられるのかをはっきりと知ることが出来ます。

クリスチャンではなくても、ほとんどの人は聖書という本について知っています。でも残念なことに日本では実際にそれを手にとって読んだ人はあまりいないようです。多くのノンクリスチャンにとって聖書のイメージはあまり親しみ深いものではないようです。私が教えている宗教社会学のクラスで大学生に「聖書についてのイメージを書いてください」とアンケートをしたら、「難しいことが書いてありそう」とか「長すぎる」、「重くて分厚い」、「堅苦しそう」、「私なんかにはあまりに神聖で厳かな感じがする」、「西洋文化のもの」、「哲学書」、「格言集」といった意見が戻ってきました。多くの人にとって聖書とはちょっと読み始めるのに躊躇するような難しい本というイメージがあるようです。

しかし、重ねて言いますが、聖書は神からのラブレターです。それを読むことによって、神があなたの友達であり、あなたをどれだけ愛してくださっているのかということを知ることができるのです。

同じアンケートの答えの中には聖書に対して肯定的なものもたくさんありました。「何千年も人々が読み続けているのは、深く人間の本質に関わることが書かれているからに違いない」とか「ためになることが書いてある書物」、「神からの贈り物」、「生きるということの取扱説明書のようなもの」というような意見もありました。「生きるということの取扱説明書」というイメージは興味深いですね。聖書を読めば、あなたの人生を生き生きとさせるエネルギーのもととなる「電池」はあなたの体の中にあるのではなく、神の中にあるんだということが分かるでしょう。あなたは充実した人生を送るために、あなたの人生に意味を与え、生きる力を与えてくださる方、神からのアドバイスを受ける必要があります。もし、あなたが神からアドバイスをもらいたいと願うならば、さっそく聖書を読んでみましょう。

聖書を読み始める前に、簡単に聖書について解説をしましょう。聖書には旧約聖書と新約聖書があります。旧約聖書に登場する神と新約聖書に登場する神は同じ神です。聖書は一冊のまとまった本というよりは、様々なジャンルの書物が集められている本です。ちょうどテレビをつけるとニュースをやっていたり、ホームドラマになったり、歴史探訪のドキュメンタリーになったり、コマーシャルになったりするのと似ています。聖書の中にも歴史書や法律書、詩歌や、哲学書、生活訓、預言書のような多種多様な書物が含まれています。旧約聖書の中にある雅歌などはまさに本物のラブレターと言っても良いでしょう。そこには男女の恋の歌が記されています。「恋人よ、あなたは美しい。あなたは美しく、その目は鳩のよう」というような言葉が数多く出てきます。
「聖書は神が書いたものですか、それとも人間が書いたものですか?」と聞く人がいます。あなたが手に持っている聖書はもちろん人間によって書かれたものです。旧約聖書はイエス・キリストが誕生する前に、何百年もの間様々な人によって書かれました。著者の中には王もいるし、祭司や歴史家もいるし、農夫もいます。新約聖書も紀元50年ぐらいから100年ぐらいにかけて初代教会の指導者達によって書かれました。

しかし、聖書は人間によってそれぞれの時代にそれぞれの時代の状況を反映しながら書かれたものですが、同時にそれはやはり神の言葉なのです。聖書の中に記されている人類の歴史や預言者の言葉や、人々の信仰告白の言葉や教えの言葉を通し、神が私たちに語りかけるのです。

テモテへの手紙二3章16節に「聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえに有益です」と書かれています。聖書が書かれた目的は、その前の15節にあるように「この書物は、キリスト・イエスへの信仰を通して救いに導く知恵を、あなたに与えること」です。
ヨハネによる福音書にも、その書物が書かれた目的が明確に記されています。それは「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。」（ヨハネ20：31）

もしあなたがキリスト教のことを知りたいと思い、聖書のどこから読んだら良いのか迷っているのなら、新約聖書のマルコによる福音書を読まれることをお勧めします。この中にイエス様がど

のような方だったのかということが簡潔に書かれています。16章しかない短いものですから、一日のうちに全部読むことが出来るでしょう。

その後で旧約聖書を読んでみたらどうでしょうか? 創世記から読むことをお勧めします。アダムとエバの話や、ノアの箱舟、バベルの塔などの有名な話が出てきます。物語のところは読みやすいですから、どんどん読み進んでください。出エジプト記の途中から律法と呼ばれる様々な祭儀や倫理に関する規定が出てきますが、最初はそういうところは飛ばしてしまっても良いでしょう。律法の書でも所々物語的な部分が現われてきますから、そのようなところだけを拾い読みしていってもかまいません。

なぜ律法や預言書などでなく、物語のところを先に読むことを勧めるかというと、神の私たちに対する愛が歴史を通じて表されているからです。聖書の全体の流れは、神を見失って滅びへと向かう全人類を救い出すために、神が「自分に立ち返って来なさいと」繰り返し語りかけている歴史そのものなのです。イエス・キリストは唐突に2000年前に現れたのではありません。人類の歴史の始まりから神はちょうど「雌鳥が雛を集めるように」、自分のところへ戻って来なさいと預言者を通じて語り続けました。それにもかかわらず神に従うことが出来ずに滅びへと向かっていく人間を救うために、イエス・キリストがこの世に送られたのです。聖書とは神による人類救済の歴史についての本なのです。

聖書を理解するには、まず聖書全体の大きなテーマを見つけることが大切です。創世記の冒頭に神が世界の造り主であるということが記されています。日本人をはじめ自然崇拝や祖先崇拝をする文化に生まれた国の人は、いろいろなところに別々の神がいると考えます。大きな山を見ればその山に神聖なものを感じ、山の上から見た朝日を仰げばそこにまた神々しい神の姿を感じます。しかし、聖書の神はそのような山や太陽や全宇宙さえも無から創造した唯一神（ただ一人の神）です。

次に大切なテーマは、神には人格（喜怒哀楽）があるということです。あなたに対して関心を持ち関わってこられる神なのです。神は最初の人間アダムが一人ぼっちでいるのを見た時、友達を造ってあげようとエバを創造します。アダムとエバが罪を犯して神の前にうしろめたい気持ちでいた時、神は彼らに「あなたどこにいるのか」と呼びかけます。神はあなたを愛し、あなたに呼びかけ、あなたに関わってこられます。

ある人は、神は信じるけれども神とは宇宙の法則のようなもので、宇宙の進化や生命の誕生に関わっているが、人格など持たず、人間の生き様などには全く関わりのない神だと言う人がいます。しかし、聖書の神は人が罪を犯せば怒り、また「なんでこんなだめな人間を造ってしまったんだろう」と後悔したりします。それればかりではなく、人の死の前で涙し、人が道を踏み外してしまっているのを見て悲しまれる神なのです。

「喜怒哀楽があるなんてなんだか人間的だなあ。そんな神様は神なんだろうか」と思う人がいるかもしれません。しかし、神が人間に似ているのではなくて、私達が神に似せて造られたのです。創世記1章26節には神がご自分のかたちに私達を造られたと記されています。天地を創られた後、神はそれを見て「これはとても良く出来たな」と感じます。神はあなたを造って、感激したのです。そして、「なんて素晴らしいのだろう」と思われたのです。

もうひとつ大切なテーマが創世記の中に現われます。それは人間が犯してしまった罪の問題です。罪とは私達が神に対して犯してしまった取り返しの付かない出来事のことです。せっかく神が私たちのために用意してくれた人生の祝福を全てふいにしてしまうような過ちを私達が犯してしまったということです。

罪とは何でしょうか?英語で罪の事をＳＩＮといいます。まんなかにＩ（私）がいることが罪を示しているのだと覚えておいてください。罪とは、神が私達に喜びと平和の中に生きることが出来るようにと与えてくださった生きるための教えを、自己中心的な思いからないがしろにしてしまうことです。

「聖書の神だけが絶対的な神であるはずがない。他の神々の中にも良さを認めなければいけないのでは」とか「私は聖書の神様は嫌い。だってなんだか偉そう口の利き方をするんだもん」とか、「自分は人に迷惑をかけずに生きてきたのだから、もう神様に頼る必要はない」とか心の中で、自分の判断基準を神よりも上に持ってきてしまう時、私たちは神を正しく理解することは出来ないし、神からの祝福を正しく受け取ることが出来ないのです。なぜならば、そのような時、私達を造られたのは神であって自分ではないということを忘れてしまっているからです。

エデンの園でヘビがアダムとエバに善悪を知る木の実を食べることを勧め、「それを食べると、目が開け神のように善悪を知るものになる」と言いました。その言葉からもアダムとエバが食べた善悪を知る木の実というのが、自分自身を神の立場に置き、全てを自分の基準で判断しようとする高慢の罪を引き起こすものだったということが分かります。もし、この罪の問題を解決することができなければ、私たちは命の源である神から切り離されたままになって死んでしまいます。ここで言われているのは肉体的な死ではありません。もっと私たちの本質に関わる、霊的な死のことです。

多くの人は「神より偉くなりたいと思ったことはないし、神に反逆しようなんて思ったこともない」と言うでしょう。むしろ熱心に神を求めている人が多いです。にもかかわらず、私たちの心の目は曇っていて限界があります。神の方から私たちに出会ってくださることがなければ、私たちは神の愛を知ることも実践することも出来ないのです。

私たちに対する神の愛と私たちの罪の問題。この二つは絶対避けて通ることの出来ない聖書のテーマです。TBCでは罪の問題とその解決法については9月4日から毎週日曜日午前11時からの「グッドニュースクラス」で学べますから、ぜひそれに参加してください。

以上聖書の内容について簡単に説明しましたが、実は聖書に書かれている内容について知っていても、それだけでは聖書からのメッセージをあなたの人生に生かすことが出来ません。パウロは、教会の中にいつも学んでいるけれど、いつになっても真理の知識に達することができない人たちがいたと言っています（２テモ３：７）。聖書は神からのラブレターとして読まなければならないのです。聖書はただの本ではありません。私たちを聖書の真の著者である神と出会わせてくれる本です。しかし、その読み方を阻む三つの問題点があります。

一つは聖書を知識として学ぼうとすることです。聖書は文学作品としてはシェイクスピアよりはるかに高度な研究がなされています。聖書の中にある全ての言葉は調べつくされており、聖書についての神学的な研究で新しい発見をするなどということは、調べ尽くされた日本で新種の蝶を見つけるのと同じぐらい困難なことです。私たちにとって聖書を学問的に学ぶことが目的ではありません。聖書はあなたへの神からの個人的な手紙なのです。

日本のミッションスクールの大学ではキリスト教概論という授業があって、学生に聖書のことについて教えています。しかし、実を言うとそのクラスを取ってクリスチャンになったという学生はあまり多くありません。それは、大学は教会ではないので、聖書の言葉を信仰を通して受け入れるようにと勧めることが出来ないからです。もしそれを強制したと受け取られると信教の自由に反してしまいますから、学校はそれに対して慎重です。そこで、聖書を信じて受け入れるものとしてではなく、学ぶ物として教える傾向があるのです。客観的であろうとするが故に、聖書の歴史や構成、著者、キリスト教の歴史、教義、人物伝のようなものが講義内容の中心となって来ます。そして学生は聖書の内容をどれぐらい知っているか最後にテストされます。もし、あなたがそのテストでＡを取ったからといって、それで神のことが本当に分かったということにはなりません。学生時代ミッションスクールで学んでいたが、キリスト教の授業が一番つまらなかったという人に時々出会います。それは聖書の学びの目的が知識を得るためのものになっていて、神と自分の関係について反省する機会となっていないからです。

第二に合理主義です。多くの日本人が奇跡のところで躓いてしまうと言います。「創世記に出てくる人間の寿命が長すぎる。あ

りえない」などと言って、投げ出してしまう人がいますし、新約聖書の福音書だとイエス・キリストの処女降誕や復活のところで躓いてしまう人がいます。今、このメッセージを聞いているノンクリスチャンの方達の中にも聖書の中の奇跡が信じられないと悩んでいる人がいると思います。

それは、聖書を合理的に読もうとするからなのです。現代人は物事を分析する時、合理的にすることが良いと思っています。それは決して否定すべきことではありません。もし合理的に考えたり行動したりすることを放棄するのなら、あなたの生活は成り立たなくなってしまうでしょう。ですから合理的に考えるのを止めて迷信を信じなさいと言っている訳ではありません。

しかし、合理性については気をつけなければならない点があります。合理的に物事を積み上げていっても、それが私たちの人生に役立たないことがあるのです。ワイシャツを着るとき、ボタンをひとつずつずらして付けてしまったとします。一つ一つのボタンは正しく付いています。しかし、シャツを着終わった時、右と左がずれてしまいます。それと同じように、細かい点では合理的で正しく見えてもそれが全体では失敗しているということがあるのです。

人間は放射性物質についてその性質を研究し、そこからエネルギー取り出す方法を合理的に計算しました。しかし、人間はその知識を用いて原子爆弾を作りました。8 月 6 日は原爆記念日です。もしあなたが広島平和記念資料館に行けばそこで、原爆を落とされた人たちがどのような苦しみを受けたのか知ることが出来るでしょう。また、今年津波によって引き起こされた福島第一原子力発電所の事故によってどれだけ多くの人がその生活を脅かされているかということ私たちは連日ニュースで聞かされています。

合理的であることがいつも私たちの人生に合理性を与えるわけではありません。目的を見失った合理性というのは、私たちの人生を無意味にしてしまいます。近代人である私たちは、合理主義を自明のこととして生きています。それは発想の仕方が科学的だということです。近代の学問はこの合理性に大きく影響されています。それは、神学にも影響を与えました。

日本の書店に行くと聖書の解説書が多く並んでいます。合理的で学問的なアプローチから、復活を弟子達による「幻視体験」と捉えたり、奇跡を弟子達の信仰の「文学的な表現」として説明したりするものが多いです。そうすることによって、奇跡につまずいている人たちを「そうか、聖書は別に言葉通りに読む必要はないんだな」と納得させることになるのですが、あなたはどう思いますか?

ロシア文豪ドフトエーフスキーが『カラマーゾフの兄弟』の中で登場人物の言葉を借りてこんなことを言っています。

「ほかでもない、世間に行われておる科学は、結合して一つの大きな力となって聖書に約されておる全ての尊いことを解剖した。それが現世紀に至って最も甚しくなって来た。世間の学者の行うた容赦のない解剖分析の結果、以前神聖とされておったものは影も形も残らんことになってしもうた。しかし、彼らは部分部分のみ解剖して、全体というものをすっかり見落としておる。」

私もドフトエーフスキーに賛成です。どうぞ聖書を全体として読んでください。もちろんあなたにとって納得のいかないところが出てくると思います。でも、全てをそのまま受け入れながら読んでみてください。全体が分かった時、あなたは一つ一つの奇跡物語をもっと素直に受け入れることができるようになっているはずです。

第３番目の客観性についてもお話ししましょう。あるポストモダン学者が「近代医学が大きな発展を遂げるきっかけになったのは、人々が人体解剖を行って、人間の臓器を凝視した時からだ」と言っています。体の中にどのような器官があって、それがどのように働いているかということを人間は理解しました。体というのは機械みたいなもので、ここが悪ければここを切ればよいし、ここここをつなげばこの病気が治るとか、人類は様々な知識を解剖学から得たのです。

ところが、それと同時に近代医学は患者に対する共感性を失ってしまいました。患者が何を恐れ、何を求めているのか、また患者と家族のふれあいとか、罪の解決とか、天国の希望とかそのようなものは医者にとっては主要な関心ではなくなりました。なぜそんなことが起きてきたのかというと、分析する者と分析される者が分裂してしまったからなのです。

シカゴに家族旅行したとき、友人から「シカゴ博物館に行ったら良いよ」と勧められました。「人間の輪切りの標本があるからぜひそれを見ておいで」と言われました。わたしはそういうのは気持ちが悪いと思って最初から見るつもりはなかったのですが、英理子と娘達が「パパ、見つけたわよ。おいでよ、おいでよ」というので、見る羽目になりました。なんだか薄切りのピンクのハムみたいなものが樹脂で固定されてガラスケースの中に展示されていました。確かにそれは人体の薄切りの標本だったのです。

その時、私は感じました。この標本になっている成人の女性は、一人の娘として育ち、家族に見守られ、人生の中で楽しかったことや悲しかったことを経験したはずです。でも、みんなが見つめているその薄切りの物体の中にはその人の人生の尊厳とか、生き様とかそのようなものは全く顧みられることなく、ただ物体として観察されていたのです。それと同じように、私たちは、聖書を人体の薄切りを研究するように客観的に分析しながら読むことも出来ます。ただし、そのような読み方をする限り聖書から永遠の命の秘密を見いだすことはできません。

聖書は神からのラブレターだということを思い出してください。ラブレターには書き手がいます。あなたのことを思い、あなたを愛している書き手です。あなたにとってその書き手と出会うことは、手紙そのものよりも大切です。聖書を読むことの最終目的は、あなたが聖書の書き手であるあなたの造り主と出会うことです。聖書はラブレターを読むように読む必要があります。もしあなたがラブレターをもらった時、「あなたが好きです」と書かれているその手紙を、「その言葉が真実であるという証拠はあるのだろうか」なんてことは詮索しながら読まないはずです。聖書も同じです。神が「あなたのことを好きだ」と言っています。「わあっ、本当ですか。ありがとう」と言ってその言葉を受け止めればよいのです。また「あなたの罪は赦された」という言葉を聞いたとき、「ありがとうございます。私はそれにふさわしく生きていきます」と答えればよいのです。

聖書を読むときの私のお勧めの読み方があります。それは「聖書は聖霊に助けていただきながら読め」ということです。テモテへの第２の手紙 3 章 16 節に「聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえに有益です。」と書いてあります。聖霊の導きによって書かれたと書いてある以上、読む人も聖霊の導きによって読まなければならないのです。もし、私たちが聖霊の助けを借りずに聖書を読もうとするならば、聖書が単なる知識の書や律法の書になってしまう危険性があります。「神はわたしたちに、新しい契約に仕える資格、文字ではなく霊に仕える資格を与えてくださいました。文字は殺しますが、霊は生かします」（第２コリント３：6）と書いてある通りです。

聖書を読むとき、聖霊の助けをいただくためには、私たちにいくつかの心構えが必要になります。

第１番目は「いつも聖書を手の届くところに置いておく」ということです。もしあなたが聖書に何の期待もしていないなら、きっと埃だらけの本棚の隅にしまっておくことでしょう。あるラジオ番組で、アナウンサーが日記をつけ続けるこつは、それをダイニングテーブルの上とか、書斎の上とか、枕元とかいつでも目に付くところに置いておくことだと言っていました。そうしたらもう一人のアナウンサーが「そういえばゴルフのうまい人はいつもゴルフのパッドをすぐに手に取れるところに置いておくんですよ」と言っていました。暇さえあれば部屋の中でスイングの練習をしているので、ゴルフが上達するんだそうです。聖書も同じです。いつも手の届くところに置いておきましょう。そして暇さえあったら聖書を手にして読んでみましょう。５分の暇があったら、1 章読むことが出来ますよ。

第2番目は、「待ち望んで読む」ということです。昔のことですが、私が九州の神学校で学んでいた時、英理子は婚約者でした。彼女は東京に住んでいました。20年以上前のことですからまだEメールもフェイスブックもありません。コミュニケーションの方法は手紙か電話しかありません。貧乏な学生にとって長距離電話はお金がかかるので、当然のこととして私たちは文通していました。彼女から手紙が来るのが待ち遠しかったのを覚えています。彼女は筆まめとはいえなくて、一通の手紙をもらうために、私は三回は手紙を出していました。神学校の寮の玄関の廊下に木製のメールボックスがあって、その中に手紙が入っていると外からでもチラッと見えるのですが、夕方になるとぶらぶらっと廊下を歩いていっては、手紙が入っていないかなと思って、横目で自分のメールボックスを見ます。手紙が入っていれば、大急ぎでそれを手にして自分の部屋に飛び込みそれを読みます。誰でも好きな人から手紙が来たら、真っ先に読みますよね。聖書も同じようにわくわくどきどきしながら読む必要があります。神様のみ言葉を待ち望みながら読むのです。

第3番目は、「祈りながら読む」ということです。昔、私が牧師になろうと決心した頃、それを導いてくれた牧師は松村秀一先生でした。彼は、私に聖書の読み方を教えてくれました。「聡君、僕はね、牧師をしているけれどそれでも時々疑いや不安になることがあるんだ。だから聖書を読む。しかし、聖書を読んでいる時でも悪魔が働いて僕の心に疑いが起きてくることがある。その時僕は祈る。祈っている時は悪魔は手出しが出来ないから僕の心には疑いが起きないんだ。」聖書を読む時に祈らないで読み始めることは危険です。註解書や神学書を傍らにおいて読み始めることも良いですが、まず神様に「今から、あなたのみ言葉を読みます。どうぞ今私と共にいて、あなたの思いを私に教えてください」と祈りましょう。

第4番目は、「聖書が自分宛の手紙だということを忘れてはいけない」ということです。普通の人は自分以外の人に宛てられたラブレターなんてそれがどんなに情熱的なものであったとしてもあまり興味がわかないでしょう。聖書を読むとき、それを他人事だと思って読んでいるなら、聖霊は働きません。しかし神はあなたに語りかけようとしておられます。聖書はあなたに対するプライベートな手紙なのです。イエス様は言います。「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう。（黙示録３：20）

第５番目は、「神と触れ合う」ということです。そのためには素直に信じて読むことが大切です。作家の椎名鱗三はどうしてもイエスの復活を信じることが出来なかったそうです。はじめて彼が聖書を読んだとき、彼は聖書は「バカヤローの本だ」と思ったそうです。なぜなら彼には聖書の中の奇跡が全くナンセンスに思えたからです。彼は元共産主義者で、それがもとで投獄された経験を持ちます。やがて共産主義のむなしさや自分の罪の問題を自覚し、救われたいと願うのですが、クリスチャンになるとはどういうことなのか分からないのです。

洗礼を受けてみたら何かが変わるかと思って受けてみたのですが、何も変わらなかったことに気が付きます。洗礼というのはクリスチャンになった人が受けるべきもので、洗礼によってクリスチャンになるわけではありませんから、当然と言えば当然です。けれども、彼は「情けないことにはどうしても生きたかったし、本当に生々と生きたかったのである」と告白しています。そこで聖書を読み返しますが、やっぱり分からない。今まで繰り返し読んでいたので、それはますます退屈きわまる読書になってしまったのだそうです。しかも、よりによって一番信じられない箇所、つまり復活のところを拾い読みし始めました。ルカによる福音書で、復活したイエス様が弟子達に自分が復活したことを示そうとしている箇所に来ました。「ふむ、自分は霊じゃない、うそだと思うなら、自分の手や足を見てくれ、さわってみてくれ、霊に肉や骨はないが、わたしにはあるのだって?・・・よろしい、イエス君そんなにいうのなら見てあげよう。」そうして、彼は弟子達に向かって盛んに毛脛を出したり、懸命に両手を差し伸べて見せようとしているイエスを思い描いたそうです。

「ひどく滑稽だった。だが、次の瞬間そのイエスを思い描いていた頭の禿げかかった男は、どういうわけかなにかドキンとした」と彼は書いています。彼は、その瞬間にクリスチャンになっていたのです。彼は鏡に映っている新しくされた自分の顔を見ます。鏡の中には、まるで酔っ払ったように真っ赤に輝いていて、何かの宝くじにでも当たったような実に喜びに溢れた自分の顔が見えたのです。「おまえはバカだよ」と彼は鏡の中の自分に向かって友情を込めて言ってみました。しかし、そう言われても鏡の中の顔はやはり嬉しそうにニコニコしていたのだそうです。なぜ合理主義に縛られていた彼がその瞬間イエスの復活を信じることができたのでしょうか？

彼はその時の自分を振り返って、「まずイエスの示している手や足を素直に見ようとした」のだと言います。神と相互に触れ合うことが、聖書を神からのラブレターとして読むための鍵になっているのだということが分かります。まだそれを体験していない人にはうまく言葉で言い表すことが出来ません。でも、ひとつだけ分かっていることはあなたが素直にみ言葉に応えたとき、神が現実にあなたに働きかけてくださるということです。聖書は、単なる哲学書でも格言集でも歴史書でもありません。神があなたをどれだけ愛しているか、そしてそのためにどんなに大きな犠牲を払ってくださったかということをあなたに告げる書です。しかもあなたは聖書を通じて神との相互関係を持つのです。

聖書の全てが失われても、この一節だけが残っていれば神の思いがわたし達に伝わる箇所があるといわれている箇所をご存知ですか?　それは、ヨハネによる福音書3章16節です。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」

あなたは、以前は神のことを見失っていました。自分が人生の中心だと思い、自分の力で生きていけると思っていました。自分の力や能力に頼って自分の決めた目的に向かって合理的に生きていくことが出来ると思っていました。あなたの造り主である神が働いてくださらなければ、あなたの人生は空っぽです。目的を見失った状態ではこれからも人を傷つけ、自分のことも傷付けながら生きていくことになるでしょう。神は、そんなあなたの状態を見過ごしにすることができなかったのです。神は最後にイエス・キリストをあなたのところへ送られました。キリストは、十字架の上であなたの罪のために死に、あなたの罪をあがなってくださいました。聖書はあなたに対する神の愛をあなたに教えてくれます。聖書の中にちりばめられている神のあなたに対する愛の言葉を味わってください。

「わたしの目にあなたは価高く、貴く、わたしはあなたを愛し．．．」（イザヤ４３：4）

もし、今日あなたが神と出会い、神からのラブレターを受け取ったと感じられたのなら、ぜひ今神に応えてください。神はあなたの人生を失望と焦燥の人生から希望に満ちた生き生きとした人生に変えてくださることでしょう。イエス様を信じたのでバプテスマを受けたいと思われる方はどうぞ前に出てきてください。ジョエル牧師もここにいますので共に祈りましょう。もし、あなたが今神様のラブレターである聖書を本気で読んでみようと感じておられるなら、この礼拝の後ぜひウエルカムテーブルで聖書を一冊もらってください。そしてそれを今日から読み始めてください。神はあなたを愛しています。そしてあなたが神を受け入れ神の子としての人生をスタートすることを望んでおられるのです。

お祈りしましょう。

渡辺　聡
TBC@Shibuya & TBC@Misato
Aug. 6 & 7, 2011